

# 「学習相談室」活動報告

## —— 学習スキルの改善をめざした授業の試行 ——

報告者 センター研究員（大学院教育学研究科教授） 市川伸一

### 1. 学習スキルへの着目

「学習スキル」とは、学習をすすめるためのさまざまな技能ということだが、平たく言えば勉強方法のことである。ノートのとり方、教科書の使い方、記憶の仕方、問題の解き方など、いずれも学習をすすめるために重要なことである。生徒たちは、学習によって個々の知識内容を蓄えるだけではなく、こうした学習スキルも身につけていく。

学習スキルは、スポーツや楽器演奏にたとえれば、上手な練習方法にあたるものであるから、上達のカギをにぎっている。しかし、「学び方について学ぶ」というのはむずかしいことで、ある程度教わったり、自分で工夫したりしないとなかなか身につかない。しかも、教師側も学習スキルを検討して子どもに伝えようとするのはほとんどないのが現状と思われる。我々の学習相談の研究会でも、「学校には、学習スキルをとりたてて教えるという発想はない」という教師が多い。

その結果として、効果的な学習スキルを習得しないまま中学生・高校生になって、勉強しても成績が上がらず、意欲をなくしてしまうというケースが学習相談では実に多い。附属学校においても、学習スキルに関する学習相談は多く見られる。自分で、「どのように勉強したらいいのかわからない」という生徒もいれば、あまり自覚的でない生徒もいる。とりあえず、授業は聞いているし、勉強もしているのだが、「こういうことがわからない、できない」という悩みにとどまっており、学習方法に問題があることに気づいていないというケースである。

学習相談の場では、ふだんどのような学習のしかたをしているのかを面談によって聞いていく。その上で、相談員のほうから、問題点を指摘したり、効果的と思われる方法を経験してもらったりする。最終的には、本人が自分の学習方法を自覚的に見つめ直し、自分に適した方法を模索したりつくりあげているような姿勢をもってほしいわけだが、それはなかなかすぐにはできることではない。学習相談はその一つのきっかけである。

### 2. 学習スキルの改善をめざした授業

学習相談室の中で、そうした活動を行っているなかで、

むしろ授業を通して、すべての生徒に学習方法についての注意を喚起する必要性も感じるようになった。そこで、本年度は、附属中等教育学校の2年生担当の先生方と相談し、全3クラスのそれぞれにおいて、体験的な要素を入れて、学習法についての50分授業を試行した。これは、2003年7月に行われたものである。ここでは、その概略を報告したい。

#### ①学習方法への着目——個別指導のエピソードから

まずはじめに、拙著『勉強法が変わる本』から個別学習指導場面を抜粋して、生徒に配った。小学校5年生の「K子ちゃん」が、もとの問題の答えがわかるころまで見せ、「この先、この先生は、K子ちゃんの学習方法について、どんな指導をするだろうか」と質問して、生徒に書いてもらった。（こちらが意図していたことを書いてくれた生徒は、あとで集めてみたところ3割くらいであった。）授業の中では、次の2点を学習方法のポイントとして板書した。

##### ① 定義に立ち返って考える

習った言葉の意味が大切。

結果だけの丸暗記では忘れるし、応用もきかない

##### ② 手を動かしながら考える

図表、メモなどを書き、それを使いながら考えをすすめる

「さて、これはK子ちゃんの話。君たちの勉強法は、どうだろうか。自分で気づいていない問題がいろいろないだろうか」と話をもっていった。とくに、「ひたすらやるっきゃない」と多くの生徒に、思われている御三家として、「漢字、計算、英単語」があることを話した。結果主義、暗記主義、物量主義の学習観に陥ってしまうと、工夫もしないまま時間だけ費やして効果がなく、やる気を失ってしまうものである。そこで、この授業の中では、速効性のありそうなものをひとまず経験してもらおうと思い、「工夫計算」と「苦手単語集中法」とをとりあげた。

## ②「工夫計算」のテストと解説

工夫計算のテストでは、「工夫するとすぐに解けるものもあります。2分間でできるだけたくさんやってみましょう」と教示して、「 $9 \times 99$ 」とか「 $1040 \div 2$ 」などの乗算、除算を10問出題した。よく見て、少し工夫をすれば暗算でたちどころに解けそうな問題でも、苦手意識もあってすぐに筆算をはじめ、時間もかかるし、間違いも多くなるという生徒は、中学生、高校生でもよく見かける。

この授業では、速い生徒は40秒くらいで全問解けたが、3分の1くらいの生徒は2分以内にやり切れなかった。あとで答案を集めてみると、やはり律儀に筆算をしている生徒たちである。この授業の中で、どのような工夫をすれば簡単にできるかを説明すると、「それなら自分でもできそうだ」という気にはなるようであらうしている。大切なことは、練習のときから、「簡単な方法がないかを少し考えてみる。筆算をするのはそれからでも遅くない」という姿勢をもつことであると強調した。

## ③英単語の記憶方法——「苦手単語集中法」の体験

「苦手単語集中法」とは、単語集などで英単語を覚えるときに、自分でテストしてみて間違えたものほど目立つような印をつけておき、そこに集中して時間をかけるというやり方である。この授業では、20個の英単語のリスト（英語と日本語のペア）を渡し、「1分間の勉強タイムのあと自分で英語から日本語が言えるかをテストして、できなかった単語にマークする」ということを3サイクル行ってもらった。2回目のサイクルでは、1回目に間違えてマークされたものに集中する。それでも間違えたら2重のマークにする。3回目のサイクルでは、2重マークのついた単語に重点をおく。

この方法は、「自分でもびっくりするくらい覚えられる」という生徒が多く、速効性がある。この日も3サイクル終わったあとに、「では、抜き打ちだけど、本テストをやってみましょう」と言ったが、十分自信があったためか、ブーイングのような不満はまったく起きなかった。実際、5問出題して、全問正解だった生徒が9割以上であった。

### 3. 授業を終えて

生徒に対して学習方法への注意を促すような授業は、1昨年にも実施している（センター年報第4号）。そのときは、心理学的な解説を多くとり入れ、反復よりも理解に重点をおいた学習方法をさまざまな教科を例に説明した。そのときの反省としては、生徒自身が体験する機会

が少なく、話を聞くだけに終わってしまうということがあった。そこで、今回の授業では、計算や英単語を例に、自ら体験して、学習方法による効果を実感してもらうことを念頭においた。ただ、こうした試みも、普段の授業や家庭学習と結びつかなければ、一時の経験として終わってしまうだろう。とくに授業での教師からのほたらきかけとの連携をはかる必要をあらためて感じている。

### 付録：K子ちゃんへの学習指導場面のエピソード（要約）

『勉強法が変わる本—心理学からのアドバイス—』（拙著、岩波ジュニア新書）の第1章に、筆者が「K子ちゃん」という小学5年生に個別学習指導をしている場面が出てくる。この本自体は高校生向けだが、学習方法に着目してもらうために、あえてエピソードとして生徒に配布したものである。

K子は、「20平方メートルは何平方センチメートルか」という問題に「 $20 \times 100 = 20000$ 」として間違えてしまい、なぜ間違いなのか分からないということで相談に来た。

「1平方メートルは何平方センチメートルなの？」と聞くと、「100平方センチメートル」と答える。「なんで？」と聞くと、「1メートルは100センチメートルだから」と答える。「そうかなあ」と言うと、「じゃあ、1000平方センチ？」「10000平方センチ？」と適当な答えを言うだけである。

そこで、聞き方を変えて「1平方メートルって、どういうことなの？」と聞いた。すると、これは正しく「縦1メートル、横1メートルの正方形の面積」と答えることができた。しかし、それでもまだ「それなら、1平方メートルは何平方センチメートルなの？」と聞くと、わからずに考えあぐねている。そこで、筆者のほうからは、「わからなかったら、図に書いてごらんよ」と言ったところ、図1(A)のように、まず2つの正方形を並べて書き、つぎに(B)のように大きな正方形の中に小さな正方形を書き込んだ。すると、ただちに「なんだ。100×100で10000だ！」とわかったのである。そして、もとの問題も「 $20 \times 10000 = 200000$ 」で正解を出すことができた。

しかし、ここで、「よくわかったね。次の問題にいこう」と言ってしまったのでは、学習スキルの学習指導として不十分である。ちなみに、そのときK子に、「今やった勉強でわかったことは何か？」と聞いても、「1平方メートルは、10000平方センチメートルだということ」という答えしか返ってこなかった。本当は、K子に学んでほしいのは、今のやりとりから浮かび上がってくる、学習スキル上の問題点なのである。

第一に、K子は、解決方法がわからなくなったときに、

「定義に立ち返って考える」という習慣がなかったようだ。「そもそも1平方メートルとはどういうことか」という定義は、聞けば答えることができたので、知ってはいた。ところが、自発的にそれを使って考え直そうとはしていない。第二に、「状況を図に表して、それを使って考える」ということも普段からしていないようだ。これも、促せばできるのに、また、図に表せばすぐにわかる力は

あるのに、そういう方法を自発的にはとらなかった。

そこで、ここからの学習指導では、筆者はこの2つの点をK子に強調した。それこそが、この学習を通してK子に知ってほしいことで、それはまた、他の問題につまづいたときにもそれを自分で克服するのに使える重要なスキルだと考えられるからである。

<図1 K子ちゃんの描いた正方形の図>

